

A History of the Chicken-or-Egg question:
From the First-Cause Argument to the
Nature-Nurture Controversy

Yorimitsu HASHIMOTO

横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ（人文科学）No.10 別刷

Reprinted from
THE HUMANITIES
Journal of the Faculty of Education and Human Sciences
Yokohama National University
No.10, FEBRUARY, 2008

タマゴが先かニワトリが先か 神の証明から環境決定論まで¹

橋本 順光

A History of the Chicken-or-Egg question: From the First-Cause Argument to the Nature-Nurture Controversy

Yorimitsu HASHIMOTO

0 はじめに: 「タマゴとニワトリ」の歌

「タマゴとニワトリ」という歌がある²。「昔々のそのまた昔」、ある「めがねの先生」が、タマゴが先だといひます。それを聞いていた「きむずかしやのおひげの先生」は、いやそうではなくて、ニワトリが先なのだとして反論する。そうして、タマゴが好きな子供は「タマゴ先生」に味方し、ニワトリの好きな子供「ニワトリ先生」に味方して、口論になってしまう。

そうした口論を、この歌は輪唱形式にしてみせる。タマゴが先だ、タマゴ、タマゴという歌が、ニワトリが先だ、ニワトリ、ニワトリという歌とかけあいになってつづき、結局、タマゴとニワトリ、どちらが先か、誰に聞いたらわかるんだろう、と、なぜやりに問いかけ、答えはわからないままに歌は終わる。こんな軽妙な歌の作詞をしたのは、保富康午(1930-1984)。「タマゴとニワトリ」とおなじく、学校で子供達に愛唱された「大きな古時計」の訳詞を担当した詩人である。

1970年代の半ば、筆者が幼稚園で唄ったときには、楽譜かなにかの欄外に、学帽をかぶり、ガウンをはおった「タマゴ先生」と「ニワトリ先生」の挿絵が添えられていた。しかし、タマゴが先かニワトリが先かという議論は、それらの挿絵が示唆する19世紀どころか、それこそ「昔々のそのまた昔」、遠く古代ギリシアにまでさかのぼることができる。いまとなつては循環論法の一例か、せいぜい、不毛な議論の喩えくらいにしかな言及されない難問は、では、どんなふうにも考えられてきたのだろうか。ここでは、その議論の歴史を概観し、この問題がどのような文脈のなかで位置づけられ、意味づけられてきたのか、その系譜を素描してみることにしたい。

1 プルタルコス宴会で: タマゴが先か、ニワトリが先か

「タマゴとニワトリ」という歌そのままに、タマゴが先か、ニワトリが先か、侃々諤々の議論がつづくさまを最初に書き留めたのは、どうやらギリシアのプルタルコスであるようだ³。彼は一世紀後半から二世紀最初にかけてローマ帝国の時代に活躍した文人で、その手になる英雄列伝は『プルターク英雄伝』と呼び慣わされ、かつて日本でもよく読まれた。しかし、膨大な量にのぼる彼のエッセイの本領は、むしろ鶏卵論争のような些細なことをめぐったものにある。恋愛や友人にまつわる今も昔も変わらない人生論から、宴会の料理はそれぞれの皿にもりわけるのがいいのか大皿からとりわけるのがいいのかとか、哲学論議は酒の席でもよいのかとか、それこそ「タマゴとニワトリ」の歌のように誰に聞いたらわかるのだろうと、なぜやりにしたくなるような話題までが真面

目に取り上げられるのだ。実にばかばかしくも思えるが、無用の用というべきか、彼が書き留めたからこそ貴重な記録になったものもある。プルタルコス以外に誰も体系だって記録しなかったため、第一級の資料になったエジプト神話論などその好例だろう。「鶏と卵ではどちらが先か」というエッセイもまた、そのささやかな一例といえるかもしれない⁴。

この一文は、プルタルコスの他のエッセイが多くそうであるように、複数の人物が座談会のように議論する形式となっている。彼によれば、この厄介な議論が、ソシウス・セネキオという友人に招かれた席で始まってしまったという⁵。当初は、こんな宇宙誕生にかかわるような問題は宴会で論じてもしかたがないと、並み居る客たちは茶化したり、さじをなげようとしたりした。そこへ、フィルムスという男が、タマゴが先だという説をとらえた。ニワトリとタマゴでは、タマゴの方が単純だから、そこから複雑なニワトリへと成長していったのだろうというのである。そして物事のおこるきっかけをあてる「第一原因」（英語でいう“**the first cause**”）という用語にふれながら、オルペウス教といった神秘宗教などでは、タマゴが万物の起源として考えられていることを紹介する。つまり、すべてはタマゴから始まったと自説をしめくくったのだった。

そこへ宴会の主人セネキオは、まっこうから反論を唱える。もちろん、ニワトリが先だというのである。彼によれば、むしろ世界は最初こそ完全だったという。全体があつてこそその部分であつて、部分があつてから全体ができたわけではないという論法を展開するのである。その証拠としてあげられるのが、生物の自然発生である。いまとなつては不可思議にしか聞こえないが、バッタやウナギが大地から自然に発生するように、ニワトリもまた大地から自然発生したというのだ。

と、ソシウス・セネキオの演説を引用して、プルタルコスのエッセイは、ここであっけなく終わってしまう。ニワトリが先だという説にどう反論がなされたのか、そして肝心のプルタルコス自身はどう思っていたのか、何にも記さずに筆をおいてしまったのである。酒の席で哲学談義をすべきかどうかについて、ほかの客がおいてきぼりになるような難解な話や、重箱の隅をつつくような話題は避けたほうがいまいだろうと、洒落た調子でエッセイを書いたプルタルコスのことである⁶。ややこしい水掛け論には立ち入らずに両論を併記して、あとは読者にゆだねたのかもしれない。

とはいえ、このタマゴが先か、ニワトリが先かという他愛なく思える議論は、プルタルコスも冒頭で記すように、哲学や宇宙論でいう第一原因にもかかわる厄介な論議でもあつた⁷。では、この第一原因とは何なのか。そのためには、プルタルコスをさかのぼること約四百年、同じギリシアの地で今日の哲学の基礎を築いたアリストテレスから、説きおこさなくてはならない。

2 アリストテレスの神の証明：盲腸としてのアダムのへそ

アリストテレスといえ、紀元前四世紀に形而上学の基礎を築いた大哲学者であるが、鶏卵論争はそれこそ、彼の『形而上学』に関わる問題であつた。その第十二巻第七章のなかで、アリストテレスは、プルタルコスのエッセイで紹介されていたような、タマゴのような混沌からニワトリが生まれたという議論を批判している。タマゴにニワトリを生ませるそもそものきっかけ、つまり第一原因が必要だというのだ。ニワトリとタマゴのあいだを無限に循環するだけでは、いつまでたつても起源が説明できないからだ。アリストテレスはそうやって天体の運動を説明した。天体が運動しているのは、なにかが動かしたからで、いわば玉突きのように、原因の原因の原因をたどってゆけば、最初に動かした存在にゆきつくというのである。そうして「自らは不動でありながら動かす或る者」⁸、これがつまり神だといつたのだった。続く第八章では、このことを種と植物の関係に援用

している。種があって植物があるのではなく、完全な植物というものがあってこそ、種があるのだというわけである。先のプルタルコスが紹介したソシウス・セネキオの議論は、おおむね、このアリストテレスの種と植物の関係を、タマゴとニワトリになぞらえていることがわかるだろう。

このアリストテレスの論法は、キリスト教において神の存在証明としてほぼそのまま使われることになった。その代表が、中世最大の神学者トマス・アクィナスである。アリストテレスが中世のヨーロッパでもおおいに研究されるようになった十三世紀、トマス・アクィナスは、積極的にその哲学を神学に援用したのだった。その主著である『神学大全』第一部第二問第三項、「神は存在するか」にその詳細が述べられている。

つまり、原因を無限にさかのぼるだけでは説明がつかないので、「最初の動かすもの・第一動者」が存在すると考えざるをえない、すなわちそれが神だというのだ⁹。この項の展開は、あきらかにアリストテレスの『形而上学』十二巻と同一であり、今日になって付けられた注釈にもそのことは明記してある。しかし、『神学大全』の本文には、アリストテレスは言及されていない。この『神学大全』では、残念ながら種やタマゴの議論はないのだが、アクィナスは、神の証明という議論をあたかも初めて行ったかのような印象を与える。とはいえ、この神の証明は、およそ個人の功に帰せられるものではないだろう。実際、長くカトリックにおいては、この論法による神の証明は、アリストテレスにもトマス・アクィナスにも言及することなく、ひろく一般に使われるようになったからである。

鶏卵論争は、こうして形而上学により神という存在を導くことで解決されたことになったわけだが、関連する亜種の論争もあわせて紹介しておこう。これは哺乳類版の鶏卵論争とでもいうべきもので、つまり、アダムとイブにへそはあったのかという議論である。神がアダムを作り、さらにイブをアダムの肋骨から創造したとするなら、二人にへそはないことになるからだ。この問題、マーティン・ガードナーによれば、創世記が書かれて以来、現在にいたるまで続いている論争であるが、こと絵画に関しては、ルネサンス以降のアダムには、ほとんどへそがあるという。システィナ礼拝堂の有名な天井画、神の指によって創られるアダムにはへそがしっかりと描かれており、後世のほとんどの画家は、このミケランジェロの先例に従ったというのである¹⁰。

このような過ちが、権威あるカトリックの絵本山にまでまかりとおっていることを指摘し、アダムのへそは無知の痕跡にほかならず、本来、取ってしまうべき盲腸のようなものと断じたのが、トマス・ブラウンである。この17世紀英国の博識な文人兼医者は、『伝染病としての迷信』（初版は1646）とも訳せる大著のなかで、科学と神学とを綺想あふれる形で織り込みながら、世の迷信に反駁したのである。その第五巻第五章「へそのあるアダムとイブの絵画について」で、ブラウンは「第一原因」に言及しながら、「創造 (creation)」と「発生 (generation)」は、混同すべきでないことを強調する。つまり、「神による第一の行為 (the first acts of God)」があつてはじめて、「自然の第二の行為 (the second of Nature)」という繁殖が後に続くというのである¹¹。したがって、神によって創造されたアダムとイブにはへそがある必要がなく、それ以降の子孫が、出産のさだめにしたがって、へそをもつことには何ら矛盾がないことになるのである。それゆえにブラウンは、「タマゴとニワトリのどちらが最初だったのかという問題は論じる必要がない」と記している。いうまでもなく、神が鳥を創造したことになっているからである。17世紀の人らしくブラウンは、形而上学 (metaphysics) と自然学 (physics) とを調和させようと、綺想にみちた論理を駆使してみせる。しかしそんな弥縫策は、19世紀になって進化論が登場するころには、すっかり功を奏さなくなり、少

数派だけの議論へと転落してしまうのだ¹²。とはいえ結論を急ぐ前に、鶏卵論争が日本に及ぼした余波とその変貌をみとめることにしよう。

3 江戸時代の鶏卵論争： エジプト神話のタマゴ

前節でみたように、タマゴかニワトリか、どちらが先かは循環するばかりで証明できないとして、そこから神の証明を導くという論法は、カトリックでひろく用いられた。それを日本にもたらしたのは、どうやらマッテオ・リッチであるらしい。このイタリア出身のイエズス会士は、十六世紀の後半に中国に布教にやってきて、中国語で幾何学や地理学、そしてもちろんキリスト教について著作を残し、その後の漢字文化圏にはかりしれない影響を与えた。徐光啓という、自分が洗礼した信者と二人して中国服の姿で立っている絵は、世界史の教科書や資料集などでもおなじみのものであるし、そもそもこの二人によって、今日なお使われる「幾何学」や「亜細亜」や「欧羅巴」という当て字は、一般的なものになったのだった¹³。

文字通り「欧亜」の架け橋となったリッチだが、彼はその巧みな中国語を操って、『天主実義』（1603）という書物でキリスト教を漢文で解説した。これはカテキズムとって、リッチと思しき西洋の男が、中国の男にキリスト教の教義を説くという問答形式になっている。そこでリッチは神を「天主」を訳し、その証明をトマス・アクィナスと同じ方法で説明しているのだ。その際に、アクィナスとはことなり、わかりやすくタマゴの比喩を使っている。すなわち、生き物は、自然に発生して生まれることはなく、必ずタマゴや種といった始まりがある。しかし、いくらタマゴや種をさかのぼっても無限に循環するしかない。したがって、最初の始祖がいないと説明がつかないわけで、その「種類ごとの始祖」を創造した存在こそが「天主」こと神だということである¹⁴。これはトマス・ブラウンが展開した「創造」と「発生」の区別と同じであり、これこそ、タマゴが先かニワトリが先かという議論が、漢字世界に紹介されたおそらく最初の例かと思う。

興味深いのは、その説明を聞いた中国人男性の質問である。「万物にはそれを生み出す始源者」がいて、それを「天主」というが、それなら、「一体その天主は誰によって生み出されたのか」というのである。こうしたニワトリとタマゴの循環が無限に続くからこそ、最初に神が存在しなければ説明がつかないという説明のあとだけに、ここで二人は完全にすれちがいあっていることがわかる。したがってリッチは、「天主」は「始まりも終わりもなく」、万物が「天主」によって生み出されるのであって、「天主」が何かによって生み出されるわけではないと繰り返すほかないのだ¹⁵。

しかし、天地万物は勝手に自然発生したのではなく、造物主ともいえる神が創造したのだという考え方は、中国とおなじく、日本でもなかなか受け入れられなかったようだ。この『天主実義』は、刊行されてすぐに日本に輸入され、多くの人々に読まれることになったのだが、その一人に新進気鋭の儒学者、林羅山がいる。当時、二十三才の林羅山は、1606年6月15日、日本人のキリスト教徒ハビアンと論戦した際に、三年前に刊行されたばかりの『天主実義』を引用して、その始まりもなく終わりもない創造神という観念は矛盾していると問いつめたのだった。つまり、物事には始めがあって終わりがあるのだから、始めもなく終わりもないのは詭弁であり「遁辞」にはかならず、「天主、天地万物を造ると云々」というのならば、「天主を造る者は誰ぞや」と、『天主実義』での中国人と同じ質問を繰り返したのである¹⁶。

これは当時、創世神話というものがあまり議論されなかったことと関係があるだろう¹⁷。『日本書紀』には、天地がまだわかれていない混沌とした状態を、「鶏子」ことタマゴのようだ、と記述して

いる。では、そのタマゴを誰が生んだのかというような創造主についての疑問は、あまり真剣に議論されることはなかったのだ。なぜなら、天地は開いたのであって、誰かの手によって開かされたとは考えなかったからである。それを大きく転換させたのが、江戸のおわりに活躍した国学者の平田篤胤である。彼は、西洋の書籍から仏典にいたるまで、ありとあらゆる書物を牽強附会なまでに総動員して、日本中心の宇宙論を打ち立てた。つまり篤胤は、天地開闢のころに日本ができたのではなく、天之御中主神という日本の神が天地と日本とを創造したと、創造神話を造り替えたのだ。その際に篤胤が参考にしたのが、リッチらイエズス会士のキリスト教についての漢文著作だった¹⁸。林羅山が反論してから、約二百年たった十九世紀初頭のことである。

ただタマゴとニワトリの議論について、篤胤とその一派は、第一原因論を援用しながらも、あまり関心を示さなかったようだ。天地の区別のない原初の混沌を「鶏子」になぞらえる記紀の名残だろうか、むしろ、ニワトリよりもタマゴが世の始まりとして多く登場する。たとえば、篤胤の代表作の一つ『古史伝』(c1815-c1825)では、天地創造のころを「鶏子」になぞらえる記紀と、エジプト神話の共通性を指摘している。共通といっても、篤胤の場合は、記紀神話の真実を、遠くエジプト人が誤って伝えたと考えるのである。それによれば、「西洋の延実登[エジツト]という国の祁邇夫[ケニブ]という大神、無始より有りて、此ノ神の口中より一ノ卵を吐出せるが、漸々に成長して、此全世界と成れり」という¹⁹。このエジプト神話は、ほぼ同じ文章が、平田篤胤一派の一人、佐藤信淵の『鎔造化育論』(c1825)でも繰り返されており、そこで佐藤は、この「却尼布[ケニブ]」とは、天之御中主神の異名ではないかと推定している²⁰。この「ケニブ」というエジプトの神を、篤胤がどこから知ったのかは不明だそうだが、これはおそらく大地の神ゲブ (Geb) のことといわれている²¹。それはともかく、エジプト神話までもちだしたのは中国の書物を否定するためであろう。というのも『日本書紀』の「鶏子」の記述は中国の『淮南子』などを参考にして作成されたものだからである。タマゴ状の混沌から世界が生まれたとする中国の創世神話²²に対して、キリスト教から創造神という概念を換骨奪胎することで、日本の方が真実を伝えているというのだ。ただ篤胤一派が描き出す創造神は、始祖のニワトリほか万物を創り出すことよりも、もっぱら万物の源となるタマゴを生むばかりである。「鶏子」という混沌としたタマゴから、それを産んだはずだとして、ニワトリを無理矢理ひっぱりだしてきた証しともいえるだろうか。いずれにせよ、アリストテレスから始まり、トマス・アクィナスによって洗練された神の証明は、マッテオ・リッチを経由することで、約二千百年かけて、ユーラシア大陸を横断し、日本の神道へと組み込まれたのであった。

4 進化論による鶏卵論争：遺伝か環境か

そんなふうには平田篤胤がアリストテレス以来の神の証明を援用しつつも、鶏卵論争自体にはさして関心を抱かなかつたころ、ヨーロッパでは、そうした神の証明に疑義をはさむ地殻変動が起き始めていた。聖書の記述と自然科学との齟齬が目立ち始め、神によって創造され、それゆえに固定された種という考えが揺らぎ始めたのである。

これはフランスの例だが、バルザックの知られざる傑作の一つ「無神論者の彌撒」(1836)に、鶏卵論争にとって興味深い一節がある。その冒頭で、医者であるデブランの無神論について、「卵がさきか、牝鶏がさきか、自分には解らないので、彼は鶏と卵を、その何れをも認めなかった。この男は、人間がその前代に動物であったということも、その死後の靈魂をも信じなかった」²³と説明されているのである。これはダーウィンが『種の起源』(1859)を刊行するまえのことだが、種という

ものは、ニワトリとタマゴのような円環を無限に循環するものではなく、流動したり変異したりするものであるらしいという当時の知の潮流（あるいはそれに対する困惑）を的確に表現した一節といえるだろう。進化論が認知されるにつれて、人間は動物から進化したものであり、靈魂は存在しないという進化論者と、宗教者とのあいだで論争がひきおこされたからである。その結果、鶏卵論争はあらたな局面をむかえ、進化論によってタマゴが先という一応の決着をみることになったのであった²⁴。

その決着をもっとも明快に説明し、広く知らしめるのに功があったのは、ドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルかと思われる。ヘッケルはダーウィンの進化論に多大な影響を受けたが、20世紀初頭まで長く改訂され、出版されつづけた一般向けの啓蒙書『人間の進化』（1874、英訳は1879）で、この問題に触れている。ヘッケルは卵子の系統発生を説明し、生物の起源はアメーバ状のものであったことから、「タマゴとニワトリ、どちらが先か？」という「謎」は、「ニワトリよりはるかまえにタマゴが生まれた」ということになることと記した。つまり、「トリのタマゴとしてタマゴが生まれたのではなく、原始的な未分化のアメーバ状の細胞として」誕生したというのである²⁵。

ヘッケルにすべては帰せられないにしても、その英訳書の最後の新版がでた1912年ころには、ニワトリが先か、タマゴが先かという議論は、どうでもいい、つまりどちらが原因で結果なのかわからないことのたとえに使われるようになったようだ。たとえば1910年に、英国の作家チェスタンは、ニワトリが先かタマゴが先かという議論は、「無意味で終わりのない哲学談義」の象徴になっていると記している²⁶。そしてチェスタン一流の逆説的表現でもって、進化論者たちは、万物がひとつのタマゴからひとりでにうまれてきたと考え、カトリック系の自分をふくむ超自然を信じる人々は、この丸い地球は「父のいない[つまり、始まりのない]聖なるトリ」によって生まれたと考えている、と対比してみせた。興味深いのは、そこからチェスタンが能率優先の論理を批判してゆくところだろう。朝食のテーブルに供されることをのぞけば、タマゴはニワトリになるために存在しているはずだが、ニワトリはタマゴを生むために存在しているのではないというのである。ここでチェスタンが念頭においているのは、同時代人サミュエル・バトラーの「メンドリはタマゴからタマゴへの通り道にすぎない」という有名な言葉であろう²⁷。能率や効率とは20世紀初頭の英国でモットーとされた言葉だが、チェスタンは、こんなふうにしてそれがゆきすぎる危険性、たとえば優生学、などを批判したのであった。

この「メンドリはタマゴからタマゴへの通り道にすぎない」といった考え方、いわば遺伝万能論、にチェスタンが抱いた違和感²⁸は、人間や動物はどこまで遺伝に決定され、環境に決定されるのかという、進化論によって引き起こされた論争に端を発している。鶏卵論争は、進化論によって一応の説明と決着がついた結果、まさしくその進化論がもたらした別の論争、遺伝か環境かという論争に転生したのである。あいにく、タマゴが先かニワトリが先かという表現そのものはみつけれなかったが、孤児や養子など、同じ子供が異なった環境で育ってしまう悲喜劇を描く物語は、まさしく同じ問題意識を共有しているといえる。そのことは、たとえばマーク・トウェインの『王子と乞食』（1881）やキプリング『ジャングルブック』（1894）を思い起こせば容易に想像がつくだろう。

ひょんなことからタマゴをかえしてしまい、遺伝のもたらす野生と環境のもたらす教育とが葛藤するという物語が、十九世紀末から書かれ始めているのも、鶏卵論争の転生として見逃せまい。その最初のひとつを書いたのは、SFの生みの親として名高いH・G・ウェルズである。彼は、古代の巨大な鳥エピオルニス（Epiornis）のタマゴを偶然みつけ、それを無人島でかえしてしまう男の物語「エピオル

ニス島の島」(1894)を書いた²⁹。その男は、最初こそ巨大な鳥を息子のように育て、共存するのだが、だんだん本性をあらわしはじめると、最後には敵対しなければならなくなってしまうのである。この物語は、遺伝と環境をめぐる自然主義的な物語を娯楽に作り替えた先蹤といえるもので、事実、その後もさまざまなジャンルで連綿と語り継がれることになった。たとえば、人食いライオンの子供を育てるドキュメンタリー風のイギリス映画『野生のエルザ』(1966)はその直系にはかならないし、日本のドラえもん劇場映画第一作『のび太の恐竜』(1980)もまた、その系譜につらなっている。こうして鶏卵論争は、進化論によって一定の結論がだされ、そしてそれゆえに生物学固有の専門的な議論に変化した結果、遺伝か環境か、あるいはそこから派生した需要か供給か、といったような難問の隠喩という今日の地位を獲得することになったと考えられるのである。

おわりに あるいははじめにもどって「タマゴとニワトリ」の歌

以上みてきたように、タマゴが先か、ニワトリが先かという鶏卵論争は、アリストテレスの第一原因論に端を発する。その結果、「神」がニワトリを創造したはずだから、ニワトリが先ということになったわけだが、その後も侃々諤々の論争がおこったことは、プルタルコスが記録するとおりだ。ただトマス・アクィナスが第一原因論を神の証明に援用して以来、西欧では長くニワトリが先ということになってしまった。その余波はマッテオ・リッチの著作をへて中国から日本にもおよび、世界というタマゴを生んだニワトリとして創造神が構築されるにいたった。一方、西欧では進化論の登場によって、タマゴからニワトリが進化したはずだから、タマゴが先と逆転現象がおきる。こうして論争に一応の決着がついたことにより、鶏卵論争は、遺伝か環境かといったような決定不能な問題の隠喩として今日なおひろく用いられるようになったと考えられるのである。

次に冒頭で言及した「タマゴとニワトリ」という歌に関連する書物について紹介しておきたい。鶏卵論争が日本でどのように論じられたかについては十分に調査できなかったが、この議論について生物学の立場から広く日本に啓蒙した有名な書物があることがわかった。それは『卵のひみつ：少女の科学物語』といって、内田清之助によって1950年に出版されている。

内田は、とりわけ戦前に名を知られた鳥類学者だが、文章がうまいせいもあって、多くのエッセイや啓蒙書を出版した。その代表的な一冊が、この『卵のひみつ』である。豆知識を満載しており、先にウェルズがとりあげたエピオルニスも、史上最大のタマゴを残した鳥としてしっかり説明してくれている。とはいえ、この『卵のひみつ』はそうした雑学にとどまらず、生物学の基本を教えてくれる格好の子供向け教科書となっているのだ。タマゴが先かニワトリが先かについても、進化論を手際よく紹介し、鳥は爬虫類から進化したはず、つまり「最初の鳥は、爬虫類の卵のなかからうまれ出てきた」のだから、タマゴが先だと実にわかりやすく説明してある³⁰。

この『卵のひみつ』にある説明が、今日の目からみて正しいのか古いのかは、よくわからない。しかし、この書物は、第二次世界大戦が終わってまだ五年というなかにあって、おおくの少女の心をつかんだことはまちがいないようだ。この『卵のひみつ』は、1979年に板倉聖宣の手によって復刻されたのだが、彼による解説がその好例を紹介している。『卵のひみつ』は名著といわれながらも、絶版になって入手困難になっていて、その入手までの苦労話が、マンガになっていたというのである。それが『少年サンデー』の1978年1月1日号にのった古谷三敏の『ダメおやじ』である。ダメおやじがこたつにはいりながら、おでんのタマゴをみて、『卵のひみつ』という本を昔読んで、タマゴとニワトリ、どちらが先かを知って感心したのを思い出すのが、なぜだったかはどうしても

思い出せない。そこで、ダメおやじは、古本屋を三十軒以上探して、横浜の古本屋までたどりついてようやくその答えを知るのである。

冒頭で記したように、「タマゴとニワトリ」の歌は、詳細について不明ながら、1960年代から70年代にかけて歌われたことは推測できる。ヒバリの羽を頭からむしってゆくという、まるで狸を煮て焼いて食う日本の「あんたがたどこさ」のような単線的な数え歌を、保富は、タマゴが先かニワトリが先かと二派に分かれて、輪唱という文字通りに、ぐるぐると回り続ける内容の歌に変えてしまったわけである。そもそも日本の童謡には、明治時代の『蛍の光』や『埴生の宿』から続く翻訳唱歌があり、保富の「大きな古時計」もまたそうした巧みな意訳や翻案の一例であるが、「タマゴとニワトリ」となるともはや彼一流の独創とっていいだろう。しかし、タマゴが先か、ニワトリが先かという問いは、これまでみてきたように日本では問題になることが少なかった。この歌を作詞した保富の脳裏には、内田の『卵のひみつ』(1950)があったのだろうか。その点については今後の課題とするしかないが、ここでは『卵のひみつ』がよく読まれ、そのあとで「タマゴとニワトリ」という歌が書かれたことだけを指摘しておきたい。

なお板倉の解説でも詳述されているように、著者の内田清之助が鳥類学者になったのは、府立一中のころ受けた帰山信順(映画監督・教正の父である)に感化されてのことという。内田は、敗戦から5年たった『卵のひみつ』の冒頭で亡き帰山に言及し、読者のなかから「動物学へのきょうみをおぼえ、すすんで科学にこころざす人がでてくださいればまことに結構だ」と記した。それをうけて板倉は、「いい先生がいて、いい生徒が育つ」ように「いい本がいて、いい読者が育つ」と、復刻の理由を述べている。タマゴに関連させれば、これは啜啄同時といえるだろうか。禅の言葉で、雛がタマゴを内側から割ろうとすると同時に、親鳥がタマゴを外から割ろうとすることをさす。いまならインキュベーション=孵化とでもいうところだろう。

かくいうこの文章は教員志望の学生を対象にした講義の副産物であるが、あいにく筆者の力量では啜啄同時というわけにはいかなかった。学生を孵化させる一方で、しかるべきことも教えこまねばならないからである。そんなときに思い出したのが「タマゴとニワトリ」の歌である。そもそもタマゴが先か、ニワトリが先か、幼稚園児の筆者にはよくわからなかったが、二つの組にわかれて歌うのは何よりも楽しかった。あれから三十年がたち自分が「きむずかしや」で「めがねの先生」になってしまったと思うのは、結論そのものよりも、終わらない議論を交わし合うこと自体の面白さであり、それをうまく伝えられないもどかしさである。最後になったが、基礎演習を共有できた先生方とその受講生、そして幼稚園の先生に謝意を表したい。京都の幼稚園で二人の先生が教えてくれないならばこんなことを思い出もしなかったろうし、本学学生たちの挑発的な(無)関心がなければ、それをエッセイにまでしようとも思わなかったろう。この点でも、タマゴが先かニワトリが先なのか筆者にはやはりよくわからない。

¹ 後述するように、本稿は、本学学部1年生を対象にした基礎演習での講義にもとづいている。さまざまな専攻へ進む学生に対して、彼らの関心や好奇心を喚起し、図書館の使い方や論文の書き方などを習得させるよう企図された授業であるため、調査と発表の例として講義する際には、筆者の専門以外で、あまり洋書を使用せず、できるだけ身近でかつ広がりのある話題を選ぶ必要があった。本文や注に読書案内が多く、異分野を浅く横切るばかりで、およそ学術論文の体裁をな

していないのは、ひとえに筆者の力量不足であるが、その試行錯誤の中間報告として、ここに投稿した次第である。また授業運営・執筆の双方において、本学図書館、とりわけ情報サービス係の方々には大いに助けられた。改めて感謝したい。

- ² 各種文献にあたったが、残念ながら、フランス民謡に保富康午の詞というほか、詳細は明らかにできなかった。ただ原曲が “Alouette, gentille alouette (ヒバリよ、おとなしいヒバリよ)” であることを、清水潤氏から教示をうけた。このフランス語原詩は、料理のためにヒバリの羽を頭からむしってゆくという、童謡独特の残酷と無垢とが同居した数え歌のような内容であり、「タマゴとニワトリ」とは何ら関係がない。たとえば英国の映画 *Soft Beds, Hard Battles* (邦題『マダム・グルニエのパリ解放大作戦』, 1974) のなかには、パリの娼婦たちがこの歌を合唱する場面があるが、敵国ドイツの将校をいわば鳴のように身ぐるみはいで暗殺するという映画のコミカルな主題が、この童謡によって巧みに示唆されている。
- ³ James Randerson, “Chicken and Egg Question Answered”, *Guardian*, May 26, 2006 および “Scrambling the Egg”, *The Times*, May 26, 2006 が、ともに、この議論を最初に記録したとしてプルタルコスを挙げている。軽妙な記事だけに、タイムズが天地創造説をめぐる厄介な議論の種であると記すのみで、アリストテレス以来の第一原因論には両者とも当然ながら触れていない。なお、これらの記事は、映画『チキン・リトル』(2006)のDVD発売にあわせて、ディズニーが鶏卵論争の解決を依頼し、タマゴと結論されたことを報じたものである。依頼された三人は、英国の遺伝子研究の専門家、哲学者、そして養鶏家の三人であった。
- ⁴ これらのプルタルコスのエッセイは、巧みに編集された柳沼重剛氏の名訳によって岩波文庫で比較的容易に読むことができる。『饒舌について』(1985)、『愛をめぐる対話』(1986)、『食卓談集』(1987)、『似て非なる友について』(1988)、『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』(1996)を参照。また、これらのエッセイがおさめられたプルタルコスの『モラリア』は、目下、京都大学学術出版会によって全訳が刊行されようとしている。
- ⁵ 以下の記述は、『食卓談集』の「鶏と卵ではどちらが先か」pp. 70-78 に基づく。
- ⁶ 『食卓談集』pp. 19-20。
- ⁷ 『母権制』で知られるバハオーフェンは、1859年の著作で、古代の宇宙論のなかで卵もっていた象徴について考察し、プルタルコスの記した鶏卵論争は実に「高尚な問題」であり、同じ対立が、パンフィーリの墳墓の壁絵から読み取れると示唆している。J・J・バハオーフェン『古代墳墓象徴試論』(平田公夫、吉原達也訳、作品社、2004年) pp. 25-6を参照。それゆえ、アリストパネスの『鳥』で鳥が原初の卵から生まれたという記述は、卵が先だとするオルペウス教のパロディなのだと考えられるという。同書 p. 27 を参照。なお同様の指摘は、G・S・カーク、J・E・レイヴン、M・スコフィールド『ソクラテス以前の哲学者たち』(内山勝利ほか訳、京都大学学術出版会、2006年) pp. 39-42にもみられる。
- ⁸ アリストテレス全集第十二巻『形而上学』(出隆訳 岩波書店 1968年) p. 419。
- ⁹ トマス・アクィナス『神学大全 1』(創文社 1960年) pp. 44-45。
- ¹⁰ マーティン・ガードナー『インチキ科学の解説法』(太田次郎監訳 光文社 2004年) pp. 134-5。なお同 p. 145 の注 1 によれば、この問題に英国の画家がどのように対処したかについては、ホレース・ウォルポールが *Anecdotes of Paintings* (1762-1771) で詳述しているとのことだが、今回は参照することができなかった。
- ¹¹ Thomas Browne, *The Major Works* (Harmondsworth: Penguin Books, 1977), pp. 236-237。

なお漱石の『三四郎』(1909)が、ブラウンの『壺葬論』を引用していることは有名だが、この『伝染病としての迷信』を『俗説弁惑』と呼んで、もっとも重用したおそらく最初の日本人は、『十二支考』(1914-23)の著者南方熊楠である。

¹² たとえば、進化論を否定せずに、その進化の原因を「神」の意図や操作によるものと考えようとする「インテリジェント・デザイン」説などが挙げられよう。これは、アリストテレスからの第一原因論の焼き直しといえる。なお、ガードナーの『インテリジェント・デザイン』では、「アダムとイブにへそはあったか？」の章の次には、「インテリジェント・デザイン運動」が組上にあげられている。

¹³ これら興味深い東西交渉の事績については、三十年近くをかけて完結した平川祐弘『マッテオ・リッチ伝』全三巻(平凡社, 1969-1997年)を参照。

¹⁴ マテオ・リッチ『天主実義』(柴田篤訳, 平凡社, 2004年) pp. 33-34。

¹⁵ リッチ『天主実義』p. 34。

¹⁶ 林羅山「排耶蘇」, 『日本思想体系 25 キリシタン書 排耶書』(岩波書店, 1970年) p. 415。この議論の様子は、平川祐弘『マッテオ・リッチ伝 2』(平凡社 1997年) p. 89-90でも引用されている。なお和辻哲郎は、「埋もれた日本」(1951年3月)のなかで、こうした林羅山のキリスト教批判について述べ、彼のような「保守的反動的な偏狭な精神を跋扈せしめた」鎖国日本の不幸を嘆いている。『鎖国』(1950)の著者によるこの言葉には、サンフランシスコ講和条締結直前のころの歴史観の変貌ぶりが凝縮されている。坂部恵編『和辻哲郎随筆集』(岩波書店 1995年) pp. 126-9を参照。

¹⁷ その点で、14世紀前半に成立した『徒然草』の最終段が示唆にとむ。ここで、吉田兼好は八歳の時、父に仏はどのようなものかと聞く。すると、父は、人は仏の教えによって仏になるのだと説明する。それでは、その仏はどうやって仏になったのかと兼好が聞けば、それより前の仏の教えによって仏になったのだと父は答える。それでは、そもそもの「第一の仏」はどうやって生まれたのかというので、父は、天から降ったか、地から湧いたか、と答えに窮してしまう。こうして、父は息子にやりこめられてしまうのだが、その話をみんなに話しては喜んでいたというのである。『日本古典文学大系 30 方丈記・徒然草』(岩波書店, 1957年) p. 289。従って、リッチに反論した中国人も林羅山も、八歳の兼好法師と同じ疑問を繰り返したことになる。とはいえ、これは天地創造説に対する東洋人の典型的な反応の一例としてよりも、むしろ本稿では教師冥利につきる話として解釈すべきなのかもしれない。

¹⁸ 平田篤胤が、後にいう国家神道の礎となる著作をキリスト教に触発されて書いたという指摘は既に、日本思想史研究からなされていた。こうした篤胤の思想史的位置づけについては、相良亭編『日本の名著 24 平田篤胤』(中央公論社, 1984年)所収の子安宣邦「平田篤胤の世界」および子安宣邦『宣長と篤胤の世界』(中央公論社, 1977年)に多く教えられた。

¹⁹ 『新修平田篤胤全集 1』(名著出版, 1976年) p. 119。

²⁰ 『日本の名著 24 平田篤胤』p. 170。原文は『復刻版 佐藤信淵家学全集 上巻』(岩波書店, 1992年) p. 532 および p. 479 も参照。

²¹ 『日本の名著 24 平田篤胤』p. 463 補注5。

²² 世界はタマゴから生まれたという神話は、このように日本もふくめて広く世界に分布している。こうした神話の一覧については、やや平板ながらも、Anna-Britta Hellbom, "The Creation Egg," *Ethnos*, 1(1963)がいまなおもっとも網羅的で多くを教えられた。

-
- ²³ 「無神論者の彌撒」(秋田滋訳), 『バルザック全集 7』所収(河出書房, 1935年) p. 335
- ²⁴ もちろん、進化の原因をいわばタマゴにおくかニワトリにおくかは、進化論の登場以降も、諸説が提唱された。その系譜の見取り図を描くことは本稿の射程をこえているが、その問題を古来のタマゴとニワトリの比喩で論じた書物として、アントワーヌ・ダンシャン『ニワトリとタマゴ：遺伝暗号の話』(菊池韶彦・笠井献一共訳, 蒼樹書房, 1985年)と井尻正二『ニワトリが先か、タマゴが先か』(大月書店, 1995年)を挙げておきたい。
- ²⁵ Ernst Haeckel, *The Evolution Of Man*, Vol. 2 (Whitefish, Kessinger, 2004), p. 51. この書物はヘッケルのどの版を復刻したのか記載がない。また、残念ながら英訳の初版を閲読できなかったため、この鶏卵論争の記述が初版から見られたのかどうかは不明である。
- ²⁶ G. K. Chesterton, *What's Wrong with the World* (London: Cassell, 1913), p. 8.
- ²⁷ Samuel Butler, *Life and Habit* (London: A.C. Fifield, 1916), p. 134.
- ²⁸ これは、20世紀末でいえば、生物を「利己的な遺伝子」の乗り物とみなすドーキンスに代表される遺伝子万能論への違和感と比較できるだろう。実際、子供向けに書かれた七尾純『たまごがさきか、ニワトリがさきか』(アリス館, 2000年)では、著者が鶏卵論争を調べていくうちにドーキンスの遺伝子論に行き着き「まるで生き物は遺伝子の奴隷」ではないか(p. 94)と衝撃を受ける。
- ²⁹ この短編はまた中世からモーパッサンの「トワヌ」(1885)にまでいたる「タマゴを生んだ男」譚の変形とも考えられる。詳細はロベルト・ザッペーリ『妊娠した男：男・女・権力』(大黒俊二ほか訳, 青山社, 1995年)を参照。なお「エピオルニス島の島」の詳細については英米文化学会編『動物と文化(仮題)』(彩流社近刊)所収の拙論を参照のこと。この主題は、同じく遺伝と環境の相克にかかわるキプリング『ジャングルブック』(1894)のモーグリの物語と習合しながら、『グース』(1996)、『ダイナソー』(2000)、『ウォーター・ホース』(2207, 原作は1990)と、次第に少年少女の成長物語として語りなおされることとなる。この系譜については別途稿を改める必要があるだろう。
- ³⁰ 内田清之助『卵のひみつ』(国土社 1979年) pp. 21-24。